

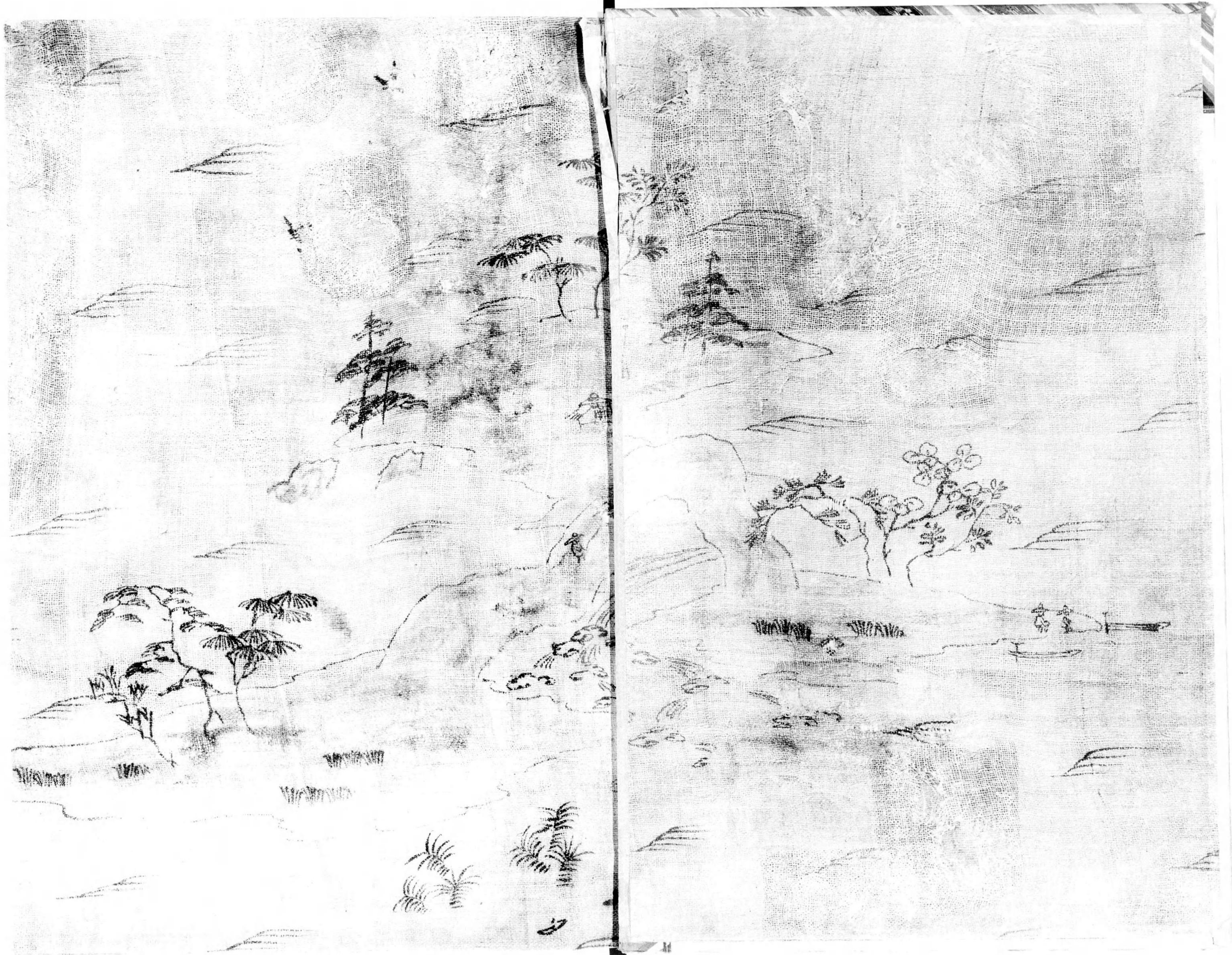
E709.2
K049
b0

正倉院御物畵錄 五

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





425-27
 E909.2
 K49
 (5)

正倉院御物圖錄 第五輯

北倉納物

目次

第十二圖	同	〔側〕
第十一圖	同	〔側〕
第十圖	同	〔鞍橋部分〕
第九圖	同	〔後〕
第八圖	榛地牟久木鞍	〔前〕
第七圖	同	〔尻懸の部分〕
第六圖	同	〔銜及三懸の部分〕
第五圖	同	〔三懸〕
第四圖	同	〔鍔・腹帶〕
第三圖	同	〔側〕
第二圖	同	〔後〕
第一圖	金銀泥繪鞍	〔前〕



第十三圖	榛地牟久木鞍	〔籠〕
第十四圖	同	〔籠〕
第十五圖	黒柿鞍	〔前〕
第十六圖	同	〔後〕
第十七圖	同	〔側〕
第十八圖	同	〔斜〕
第十九圖	同	〔前〕
第二十圖	同	〔後〕
第二十一圖	同	〔側〕
第二十二圖	同	〔斜〕
第二十三圖	同	〔三懸〕
第二十四圖	榛地牟久木鞍	〔前〕
第二十五圖	同	〔後〕
第二十六圖	同	〔側〕
第二十七圖	同	〔斜〕
第二十八圖	同	〔鞍褥〕

第二十九圖	同	〔鞍褥〕
第三十圖	同	〔三懸〕
第三十一圖	榛地桑鞍	〔前〕
第三十二圖	同	〔後〕
第三十三圖	同	〔側〕
第三十四圖	同	〔鞍褥〕
第三十五圖	同	〔鞍褥〕
第三十六圖	同	〔面懸〕
第三十七圖	同	〔籠・胸懸〕
第三十八圖	同	〔三懸・頸總部分〕
第三十九圖	榛地牟久木鞍	〔前〕
第四十圖	同	〔後〕
第四十一圖	同	〔側〕
第四十二圖	榛地牟久木居木赤塗鞍	〔前〕
第四十三圖	同	〔後〕
第四十四圖	同	〔側〕

第四十五圖	榛地牟久木居木赤塗鞍	[斜]
第四十六圖	同	[銜・鞍褥]
第四十七圖	榛地柿組三懸鞍	[前]
第四十八圖	同	[後]
第四十九圖	同	[側]
第五十圖	同	[側]
第五十一圖	同	[三懸]
第五十二圖	同	[三懸部分]
第五十三圖	榛地牟久木塗居木鞍	[前]
第五十四圖	同	[後]
第五十五圖	同	[側]
第五十六圖	同	[側]
第五十七圖	障泥	
第五十八圖	三懸	
第五十九圖	尻懸部分	

第一圖 金銀泥繪鞍 [前]

(縮寫十分之三)

十脊の鞍の中で作の最もよく、かつ皆具に近いものである。即ち鞍橋の拵は唐鞍に類し、其の前後の兩輪には金銀泥繪の雲文裝飾がある。鞍褥・腰・腰脊を具し、壺鏡には飛禽唐花を銀鍍し、三懸は所謂革鞞であつて辻金物杏葉攝蝶等の裝飾金具を皆具し、葵梨銜の拵も見られる。なほ十脊の鞍を見るに、鞍橋の兩輪がすべて覆輪を用ゐない爲に實用に際して強靱に缺くところがあること、鞍を後輪のみにつけ、前輪にこれを見ないこととは、此を遡つては上古時代、降つては中世以後の鞍橋に比して著しい相違とする。

第二圖 金銀泥繪鞍〔後〕

(縮寫十分ノ三)

前輪 高さ 三八・七種 馬挾の長さ 三二・四種

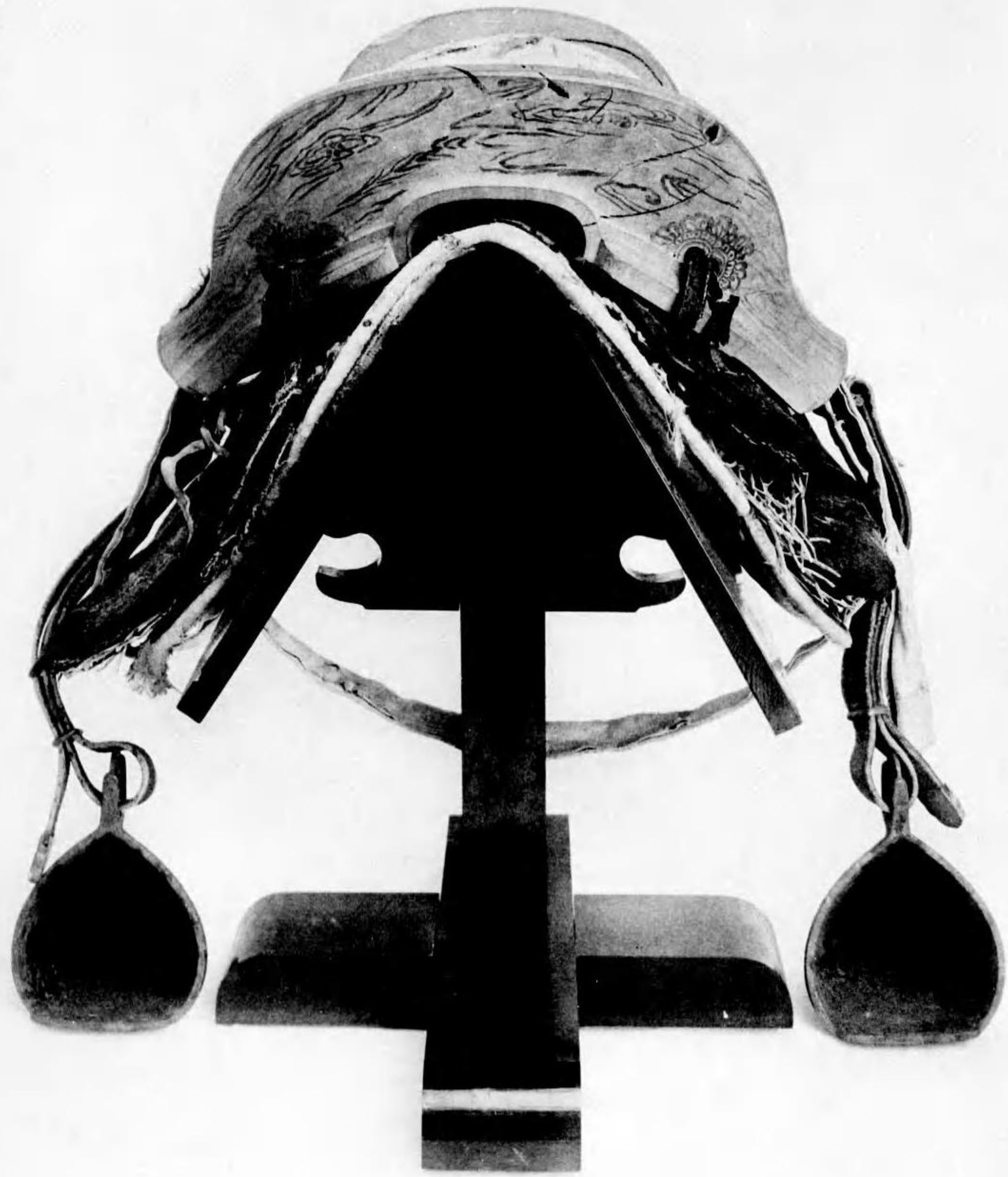
後輪 高さ 二五種 馬挾の長さ 四〇・二種

前輪・後輪は共に椽地梅を材とし、其の面に金銀泥を以て雲文を描き更に後輪のみにある鞍通しの孔縁には銀泥文座の裝飾がある。

居木は四枚居木、居木先を馬膚に於いて蟻柄に組み、馬膚を外へ廣く造出し、恰かも唐鞍の居木の如き形としてゐる。

鞍は後輪のみであり、黒革を平紵にし、結を外に出し兩端を後輪裏で締めたゞけで、後世のものに見るところの尻懸受けの鏡とか、又は

二三の他の例にある遊管の如きものを用ゐてゐない。



第二圖 全端出音 〔卷二〕

此の鞍は鞍つらと型等以前より用ゐられてゐる。其の形は、昔のものと異なり、この形は鎌倉時代に始まるといふ。其の鞍の形は、昔のものと異なり、この形は鎌倉時代に始まるといふ。其の鞍の形は、昔のものと異なり、この形は鎌倉時代に始まるといふ。其の鞍の形は、昔のものと異なり、この形は鎌倉時代に始まるといふ。

第三圖 金銀泥繪鞍〔側〕

(縮寫十分之三)

幅 五〇厘 高さ 三七厘
上幅 四九厘 高さ 三六厘

鞍橋の上に鞍褥をのせ、下に鞆・屢脊をひいてゐる。
鞍褥は心を布とし、表に唐花赤地錦、裏に白麁を張つて
ゐる。甚しく磨損してゐるが、全形はよく保たれてゐる。

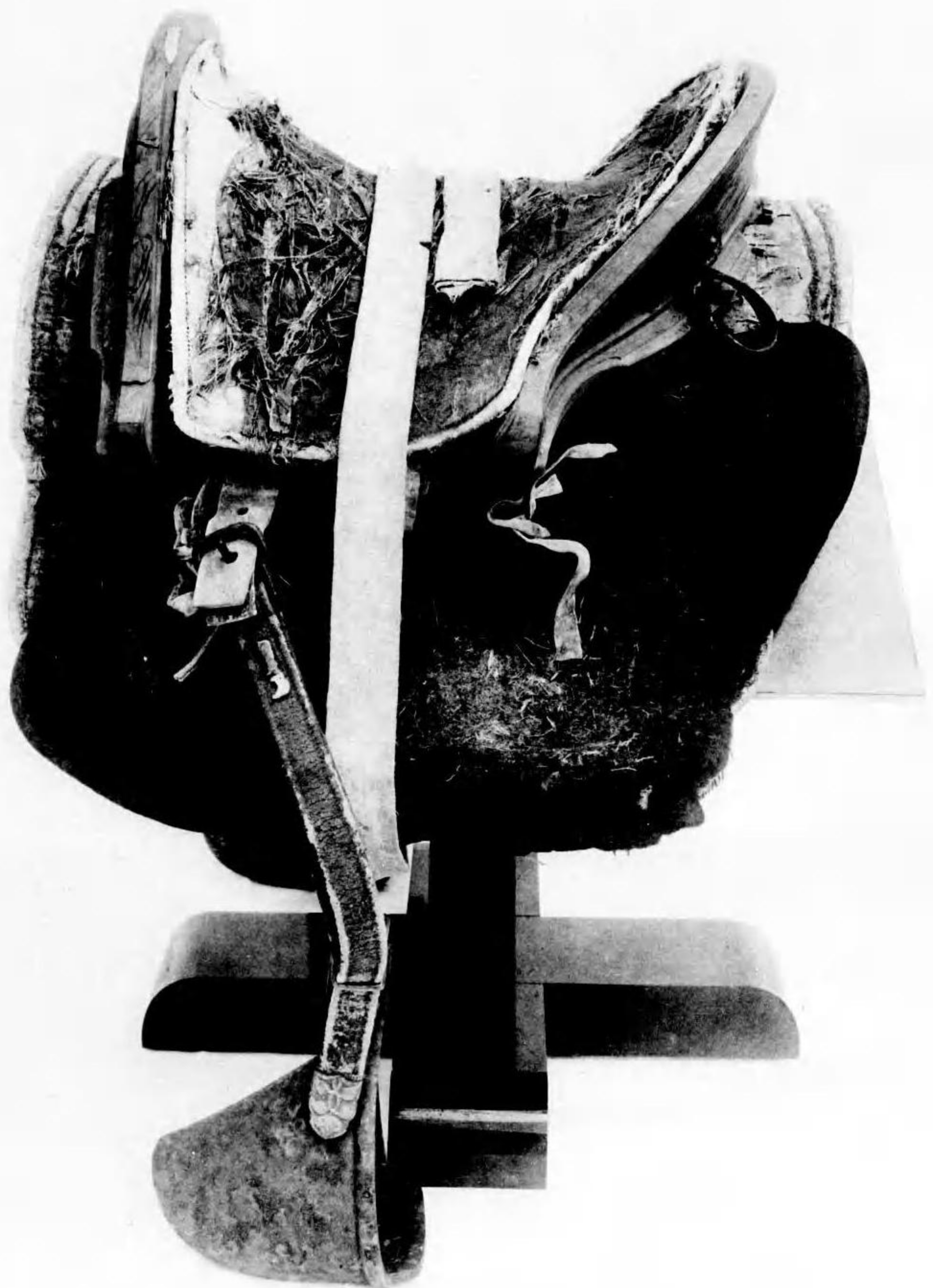
鞆は表に紫の色紙を張り、心は白布横目蘭蕙襷葉縦目
蘭蕙白布の順に重ねてゐる。

屢脊は心を布とし、表と裏とに白麁を張り、赤地錦を
以て幅六厘の廣縁を繞してゐる。

此の種は馬の種族を辨し上りなり。
 馬はたゞ力強きて、其一歩として幾く強し、其蹄も
 踏むに地を震らし其力なるなり。
 馬は其に強の心強きを辨し、心は日進時日進歩馬は其
 心強しと辨ししより、今其心と強はこれなり。
 馬は心強きを辨し、其は強き馬也、其に強き馬の
 蹄はこれなり、其は強き馬也、其に強き馬の蹄は
 此なり、其は強き馬也、其に強き馬の蹄は
 此なり、其は強き馬也、其に強き馬の蹄は

馬の種族を辨し上りなり
 馬の種族を辨し上りなり

第三圖 全馬所餘馬 〇〇〇 1877年



第四圖 金銀泥繪鞍〔銀腹帶〕
原 寸

鏡と腹帶の一部分を示してゐる。

鏡は鍍銀黒漆塗の帝鏡である。舌は僅に出で、柳葉は廣く、軽く鳩胸をなす香込には飛禽、

唐花を銀鍍してゐる。香込に於て腹は鏡に繞つて著しい角をなさず、玉縁は舌と略ぼ直角をな

し、鏡具頭には銅金を用ゐず、單に木に受板を以て鏡組を受けてゐる。

鏡組は黒漆塗の革を以てし、白革の力革を受ける鏡具を黒漆塗の鍍製してゐる外は、實・

鍍金物等は金銅製とし、殊に鍍金物には魚子地に唐花を浮彫してゐる。

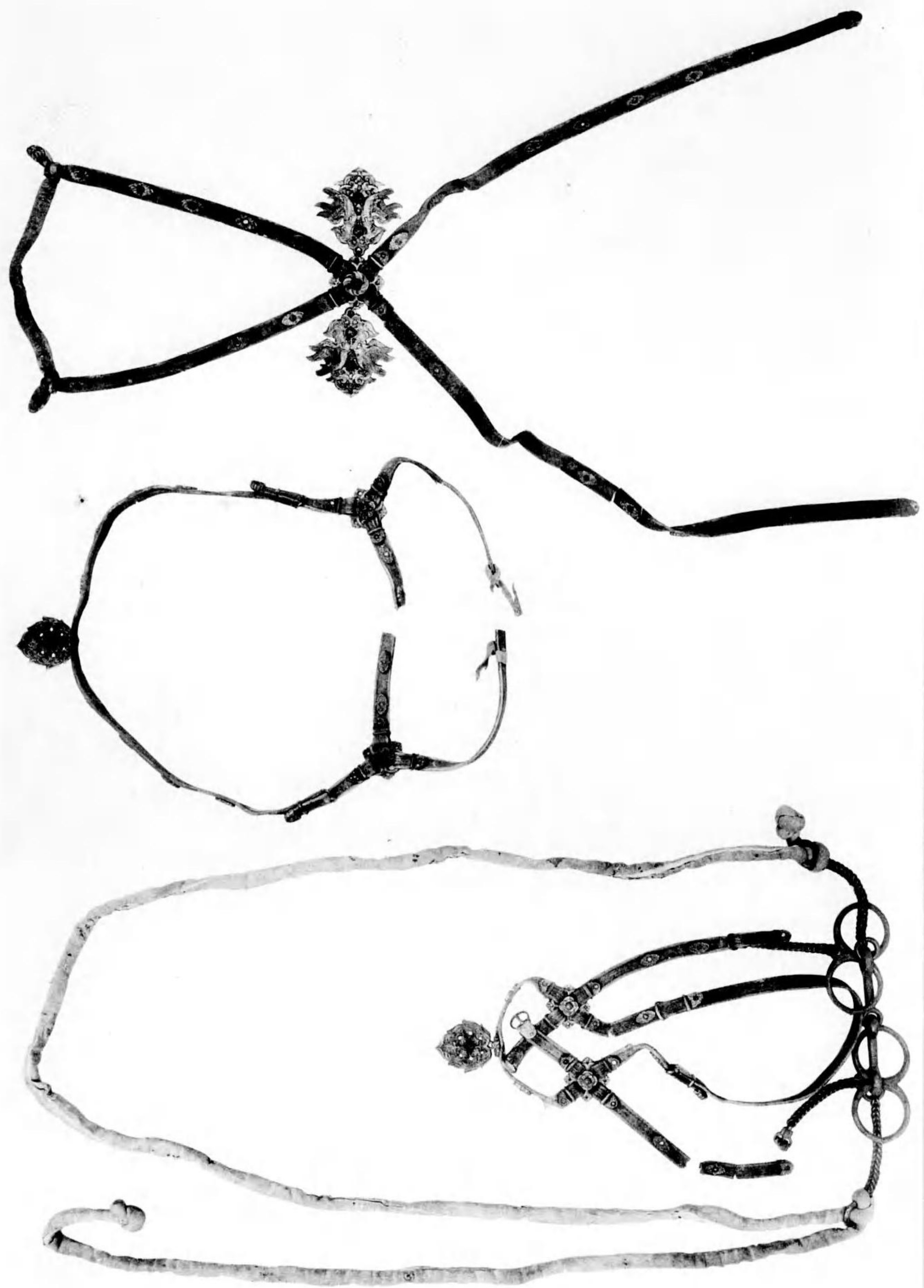
腹帶は白布製、白革の根緒からの長さが一・二八種、他は一・五種、其の片方の端に

「常陸國茨城郡大崎郷戸主大田部
五藏呂調意端」

といふ篆書がある。

第五圖 金銀泥繪鞍(三懸)
繪五分一

右から左への順に面懸、胸懸、尻懸の
三懸を示してゐる。共に黒漆塗の革を
以てし、尻懸の尾披及鞍絡みの部分と
を除いては金銅製の攝蝶金具を並べ打
つて飾としてゐる。
面懸は荷の額面懸付の鉸具に連なり
面懸に杏葉を垂れ、革緒には攝蝶金具
を打ち連ねて居り、胸懸は胸連に杏葉
一個を垂れてゐるが、尻懸の組紐にぶ
いた注金具の左右に垂れた杏葉は作の
優れたものである。



一、此の甲冑は、徳川幕府の初期に作られたもので、その構造は、
 二、この甲冑は、徳川幕府の中期に作られたもので、その構造は、
 三、この甲冑は、徳川幕府の後期に作られたもので、その構造は、
 四、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 五、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 六、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 七、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 八、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 九、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、
 十、この甲冑は、徳川幕府の末期に作られたもので、その構造は、

第六圖 金銀泥繪鞍〔衝及三懸の部分〕（原 寸）

衝と三懸の辻金物攝蝶等の金具とを示してゐる。

辻金物には四出と三出との二種があり、面懸尻懸には前者、胸懸には後者を用ゐてゐる。共に中央に花形の座を置き、圓形をなす手の間には三葉形を配して居る。端

金物攝蝶金具等には、中心に水精又は琥珀の玉を嵌め、かつ水精には下に赤縹線等の彩色を裏差してゐる。

衝は蒺藜衝と呼ばれる形式のもの、鐵製、喰を蛇腹卷とし、引手及び面懸付を兵具鉗としてゐる。



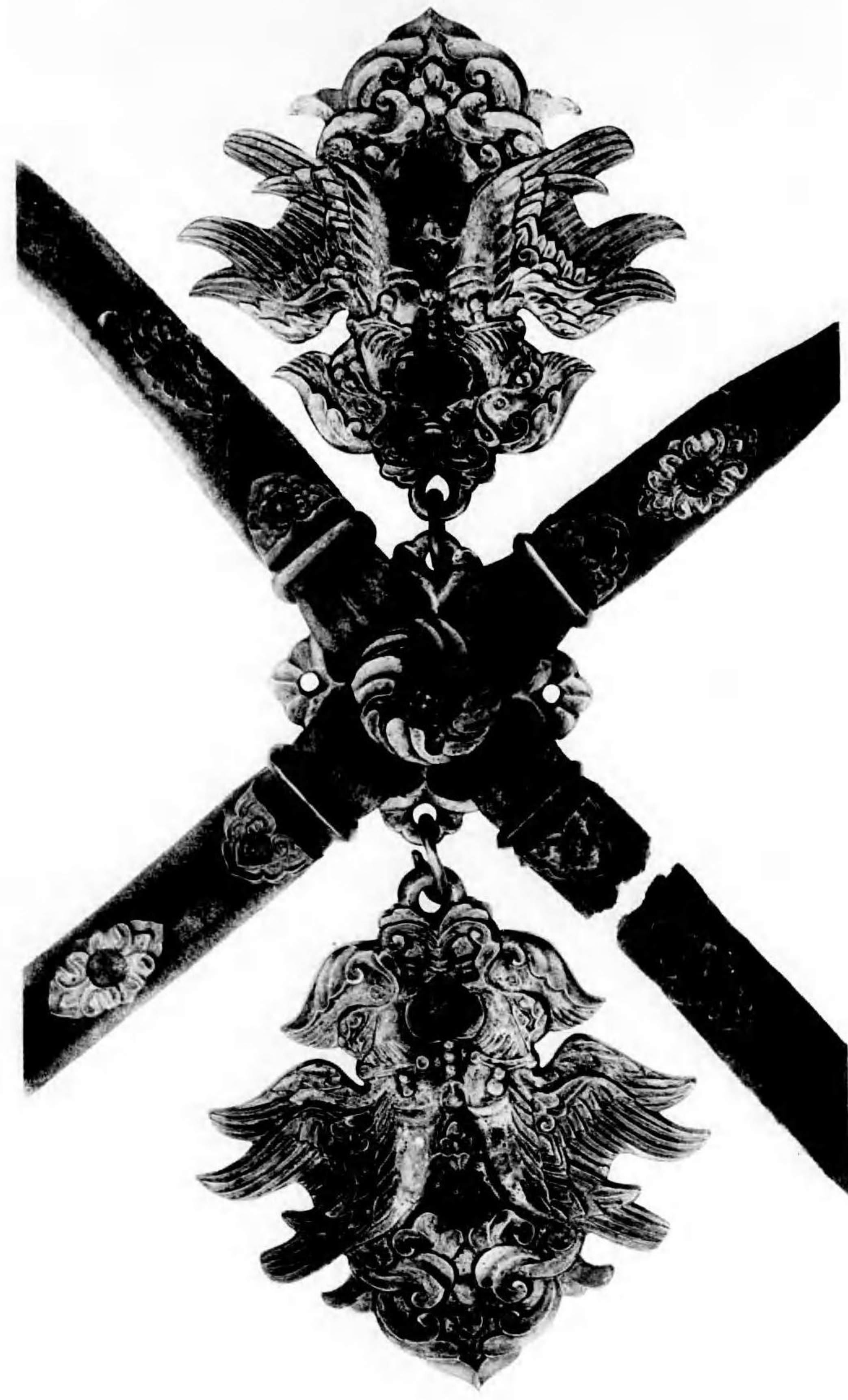
第六圖 金具類 飾 鎧具類 (前) 一頁

一、此の金具類は、鎧具類の一部をなす。其の形は、
 鎧具類の形に似て、中央に丸い形があり、その周囲に
 装飾的な彫刻が施されている。また、下部には小さな
 環が取り付けられている。これは、鎧具類の甲冑を
 固定するための金具である。

第七圖 金銀泥繪鞍「尾懸部分」
座す

香葉長き 一三種

金銀泥繪鞍の尾懸組達の左右
に垂れてゐる香葉を示してゐる。
金銅製、頭に綬を纏うた双鳥相
對して唐草裝飾の座の上に立ち、
間に裏差形文ある玉を嵌めてあ
つたのであるが、今は嵌玉のす
べてを失つてゐる。



此劍之製法
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇
其法甚奇

卷之三

第十回 金瓶梅 第五十五回

第八圖 榛地 牟久木鞍〔前〕

(縮寫十分之三)

前輪後輪を榛地とし、縁に面取を施したのみで覆輪の金物を用ゐてゐない。兩輪の馬膚を更に廣くかつ長く外に造出をなし、居木先の如き形としたのと、鐙に銀鍍の裝飾のあるのを著しい點とする。



準八圖 潛艇半八木餅 [器]

(海軍省)

此は、潜艇の模型を示すものである。其の構造は、木製の板で造られており、その形状は、半八木餅に似ている。この模型は、潜艇の内部構造や、その浮力装置などを示している。また、その下部には、二つの大きな重り（鉛）が吊り下げられており、これは潜艇の安定性を保つための装置である。

第九圖 榛地 傘久木鞍〔後〕

(縮寫十分之三)

前輪 高さ 二七五種
馬挾の長さ 二二三種
後輪 高さ 二四五種
馬挾の長さ 三九八種

後輪より見る。兩輪とも所謂磯の幅せまく、海との境を急勾配としてゐるは十脊の鞍に通じて見るところ、鞍に取付けてある組紐は尻懸の引き残りが存してゐるのである。



漆工圖 附 秤 牛 八 本 附 (對)

（圖中）

日本書紀卷之六十一云、天武天皇十三年、
 乙未年、秋八月、乙亥、天皇幸高麗山、
 乙亥、天皇幸高麗山、乙亥、天皇幸高麗山、
 乙亥、天皇幸高麗山、乙亥、天皇幸高麗山、
 乙亥、天皇幸高麗山、乙亥、天皇幸高麗山、

- 一、秤
- 二、秤
- 三、秤
- 四、秤
- 五、秤
- 六、秤
- 七、秤
- 八、秤

第十圖 樣地半久木鞍「鞍橋部分」
原 寸

後輪の部分を示してゐる。前にも述べた如く馬脣に於て居木先の如く外に突き出でゐるのは單なる造出しでありこれを黒漆塗として居る。鞍付孔はその造出しに穿たれ、座金具は銀製、魚子地に唐草を毛彫してゐる。黒鍍金製の鞍は、箱を作つて外に垂れ、一方の端はこの鞍付孔を通して居木に取り付けてゐる。鏡渡管の類を用ゐず、箱の平組みの尻懸を直接に箱をなす鞍に結びつけてゐる。



九月八日
...

第十回 雲龍寺十八公本願 一

第十一圖 榛地 牟久木 鞍 [側]

(縮寫十分ノ三)

居木と鏡粗につまぐ力革とを示すべく、鞍褥を外して鞍の側面を現してゐる。

居木は四枚、椗を材とし、其の兩端を蟻柄にして前後の兩輪に組み入れてゐる。力革は白革、隅丸に拵へた端に近く孔を穿つて鏡粗の鉸具刺金を受ける様につくつて居り、今左の部分を残してゐる腹帯は白布を以てし、其の端に「天平勝寶四年十月」の墨書銘がある。



第十一圖 刺座 牛 八 木 鐙 (附)

（附註）

此器は、大正初年頃（明治三十三年）に、
 本邦に輸入されたもので、
 其の構造は、
 牛の皮を縫合して、
 木製の座を嵌め、
 木製の鐙を、
 皮製の紐で繋ぎ、
 馬に跨り、
 鐙を踏んで、
 馬を動かすものである。

第十二圖 榛地 傘久木 鞍〔側〕

(縮寫十分之三)

鞍橋の居木の上にある鞍褥や、下にある鞆・腰脊を見る。

鞍褥は表裏の覆ひを失ひ、心の太布のみが残存してゐるに過ぎないが、形は類れてゐないから全體の形を見ることが出来る。廣げたところで幅が五七寸、長さは四四寸ある。

鞆の表は黒漆塗の皺革で、牛皮を以てして居り、これに町形文をきめこみ、裏は薄い白革を以てし、腰脊は表を白緋赤地錦廣縁とし、鞆と同様に心に蘭葎太布櫛葉を重ねてゐる。



第十二圖 瀬川幸八木製

瀬川幸八木製
 此の鞍は、瀬川幸八木が、
 京都府の瀬川村に於て、
 製作したものである。
 此の鞍は、瀬川幸八木が、
 京都府の瀬川村に於て、
 製作したものである。
 此の鞍は、瀬川幸八木が、
 京都府の瀬川村に於て、
 製作したものである。

第十三圖 椽地 牟久木鞍 [襷] (原 寸)

襷の心の拵を示してゐる。

襷は表面の皺皮の下に、縦目蘭葎太布横目蘭葎縦目の
蘭葎襷葉横目蘭葎太布といふ順序に重ねて心とし、裏を
薄い白革として居り、これを細い麻糸で綴じてゐる。

展脊も其の破れ口より見ると、心に太布三枚縦目蘭葎
襷葉縦目蘭葎太布三枚の順序に重ねてゐることを知るこ
とが出来る。

圖版の下に其の心の心をなす襷葉を示した。

第十四圖 榛地 牟久木鞍〔鏡〕 (原 寸)

鏡は蓋鏡、舌が緩かに出で、玉縁と直角に近い角度をなし、杵込の胸は強く外に張つて居り、鉸具頭には單に平金を挿んで鏡粗を受けてゐる。鐵製、黒漆塗、玉縁から杵込の胸へとかけて飛雲飛禽唐花の銀鍍の裝飾がある。鏡粗は黒漆塗の草製、其の端金物は魚子地に花枝を彫上げ、賣金と共に金銅製であり、力革にかゝる鉸具金具は黒漆塗の鐵製となつてゐる。



この黒銅製の斧頭は、その形状から見て、

土質、質金と共には金銀製の斧頭、或は銅製の斧頭と見られる。

この斧頭の形状は、其の銅製の斧頭と異なり、その斧頭の

表面は粗く、その表面は、銅製の斧頭の表面と異なり、

その表面は、銅製の斧頭の表面と異なり、

その表面は、銅製の斧頭の表面と異なり、

その表面は、銅製の斧頭の表面と異なり、

第十四回 黒銅斧頭（左）

第十五圖 黒 柿 鞍 [前]

(縮算十分之三)

前輪 高さ 二六五種
馬挟の長さ 三三五種
後輪 高さ 二四種
馬挟の長さ 四〇種

鞍橋は前後の兩輪及び居木ともに黒柿を材とし、覆輪は勿論、縁の面取もなく、海の縁は一文字をなして狭い磯に直角に接してゐる。



文平公「丁」興の如く高故の好「丁」は、
 「丁」の好故の如く、高故の好「丁」は、
 「丁」の好故の如く、高故の好「丁」は、

高故の好「丁」は、
 高故の好「丁」は、
 高故の好「丁」は、

高故の好「丁」は、

第十六圖 黒 柿 鞍 [後]

(縮寫十分ノ三)

後輪の方から見る。

居木は四枚、兩輪と同じく黒柿を材とし、大きく面取をした居木先きを兩輪の前後に突き出してゐるが、これを兩輪と組むに、馬腹に居木受けの納穴をきり、平柄をなす居木先を其の穴に組合せた後に、其の居木先きに渡した黒塗の丸紘の韋紐を磯沿ひの海に穿つた孔を通して居木裏に導き、固く締め合せてゐるところは大和鞍とも相違してゐる。

鞍は後輪にのみつけてゐる。丸紘の紫草を以てし、これを大和鞍の如くに後輪に穿つた孔に通してゐるが、其の先を居木裏には導かず、簡單に後輪裏で結び締めてゐる。鞍先きにある遊管は尻懸を受けるもの、鹿角製、中央に丸味をもたせた刳が入つてゐる。

第十七圖 黒 柿 鞍 [側]

(縮寫十分之三)

鞍梅・轡・腰脊を見る。

鞍梅は蟲損が甚しく、纒かに心となつてゐた黄色氈の一部と裏裂に使はれた太布を殘存するのみで、表裂もなく、全形も頽れてゐる。

轡は表に海豹の毛皮を張つてあるが、今は殆んどすべての毛が脱けてゐる。縁に白葛を二條並べ伏せて心とし、曇網錦を覆ひ包んで玉縁をつくつて居り、心には太布・縦目蘭蕙・木葉・縦目蘭蕙・木葉・横目蘭蕙太布の順に重ね、裏裂を白氈としてゐる。

腰脊は表裏ともに白氈を用ゐ、縁に錦を伏せてゐるが、縁裂は殆んどすべて磨損してゐる。心には太布・蘭蕙太布と重ねてゐる。



鞍十五圖 黒 林 郷 [附] 大正十一年

大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、
 大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、
 大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、

大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、
 大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、
 大正十一年四月五日、心工大正、黒林郷、大正十一年四月五日、

第十八圖 黒 柿 鞍 [斜]

(縮寫十分ノ三)

笠、鞍、腹帯を見る。

笠は壺笠、鐵製黒漆塗、胸先きはやゝ上向きに揚がり舌の短く脊込の玉縁と直角に近い角度をなし、鉸具頭は平金のみで笠粗を受けてゐる。

笠粗は黒草、其の責金と端金物とは金銅製、力革受の鉸具金物は鐵製黒塗、端金物には裝飾文様なく、中央に鎗を彫上げてゐるのみである。

力革は白草、腹帯は白草の根付より垂れてゐる。白太布製、今は左側のみを残存してゐるが、長さ一三〇糎と一〇七糎との二筋となつてゐる。

第十九圖 黒 柿 鞍 [前]

(縮寫十分之三)

拵は前掲の黒柿鞍と大體に於て等しい。即ち黒柿を材として鞍橋居木を作り、鞍掛、鞍轡、腰巻を具し、黒漆塗の壺錠を垂れ、三懸と共に皆具をしてゐる。



添十八圖

馬

鞍

馬

鞍

（續）

其ノ一 馬鞍ノ形ノ多ク、三ノ四ノ形ノ鞍
 馬鞍ノ形ノ多ク、三ノ四ノ形ノ鞍
 馬鞍ノ形ノ多ク、三ノ四ノ形ノ鞍

第二十圖 黒 柿 鞍 [後]

(縮寫十分ノ三)

前輪 高さ 二六五種 馬挾の長さ 三三二五種
後輪 高さ 二四種 馬挾の長さ 四〇種

兩輪、居木ともに黒柿を材としてゐる。居木は四枚、居木先を兩輪の前後に出し、前にのせた黒柿鞍と同一の様式で黒草の紐を以て兩輪に揃みつけてゐる。

鞍は布を心とし、紫草を丸紐にして後輪に揃み、先に尻懸付の鹿角製の遊管をつけてゐる。



本、張口鼠麴竹の油漬皮の紐管をへりして
 綴り布を心とし、紫布を其縁とし、前後に
 糸を引たる。

黒羽子と同じ形大で黒布の縁を以て前後に
 四條、額木袋を四條の前後に仕出し、袖口の
 前後に木とまの黒羽子付としたる。額木は

前後 高さ 二四寸 額木の長さ 四〇寸
 前後 高さ 二六寸半 額木の長さ 三三寸半

卷二十圖 黒 鞍 鐙 (前) (後)

第二十一圖 黒

柿 鞍

〔側〕

(縮寫十分之三)

鍔・鍔腹帯を見る。

壺鍔は鐵製打物、黒漆塗、杵込の胸を上向きにして居ることは他の鍔にも見られるが、杵込の玉縁は舌とや、斜めに交はり、半舌鍔に近付うとしてゐる。

鍔粗は黒草・端金物と責金とは金銅製、力革受の鍔具は鐵製黒塗となつて白革の力革を受けてゐる。

腹帯の根を白革を以てし、居木から鞆・腰脊を通して下に出し、腹帯を柄みつけさせてゐる。腹帯は今は一方向のみを残存してゐるのみ、太布製、根に柄み二條に分れて垂れてゐるが、長さは一條が一二〇柄、他が一〇〇柄、其の片端に「國司史生長首上志斐連秋島」司擬主張□□□□代」と墨書がある。





(L) 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000
 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000
 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000
 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000
 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000
 1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000

1000-1000-1000 (L) 1000-1000-1000

第二十二圖 黒 柿 鞍 [斜]

(縮寫十分之三)

鞍櫛・鞆及び展脊の拵を見る。
鞍櫛の表裂は失はれてゐる。心は白氈を中に、上に白
絨、下に太布を重ねてゐる。
鞆に於ては左右の腰の列りはや、強く、表は今は白革
となつてゐるが、これは毛皮の毛がすべて脱離した爲め
であつて、最初は毛皮を用ゐたのであらう。錦の細
縁が繞され、心は太布横目蘭莖木葉縦目蘭莖木葉横目蘭
莖太布の順に重ね、絨を裏としてゐる。
展脊は表に白絨、裏を太布とし、錦の廣縁を繞してゐ
るが、今はその上邊の一部分に錦裂を残してゐるのみで
ある。

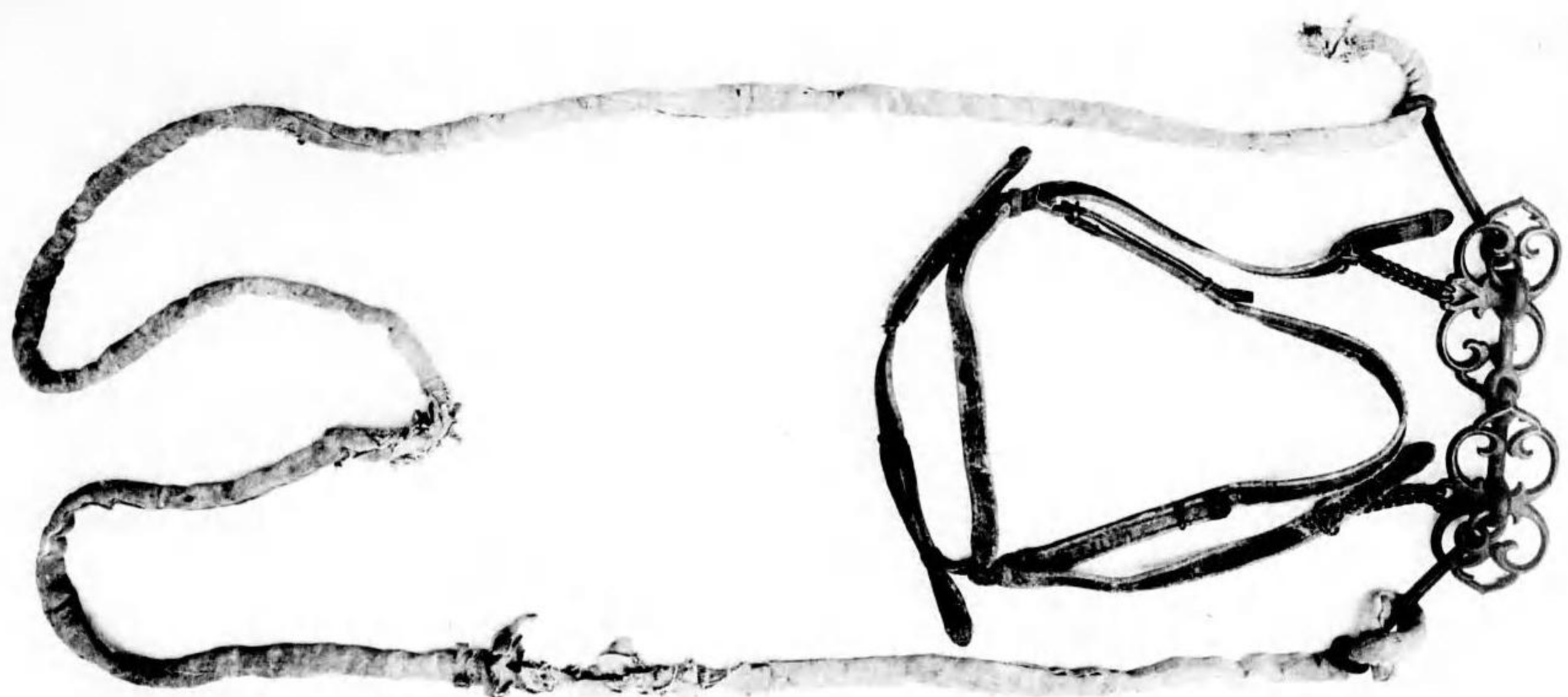
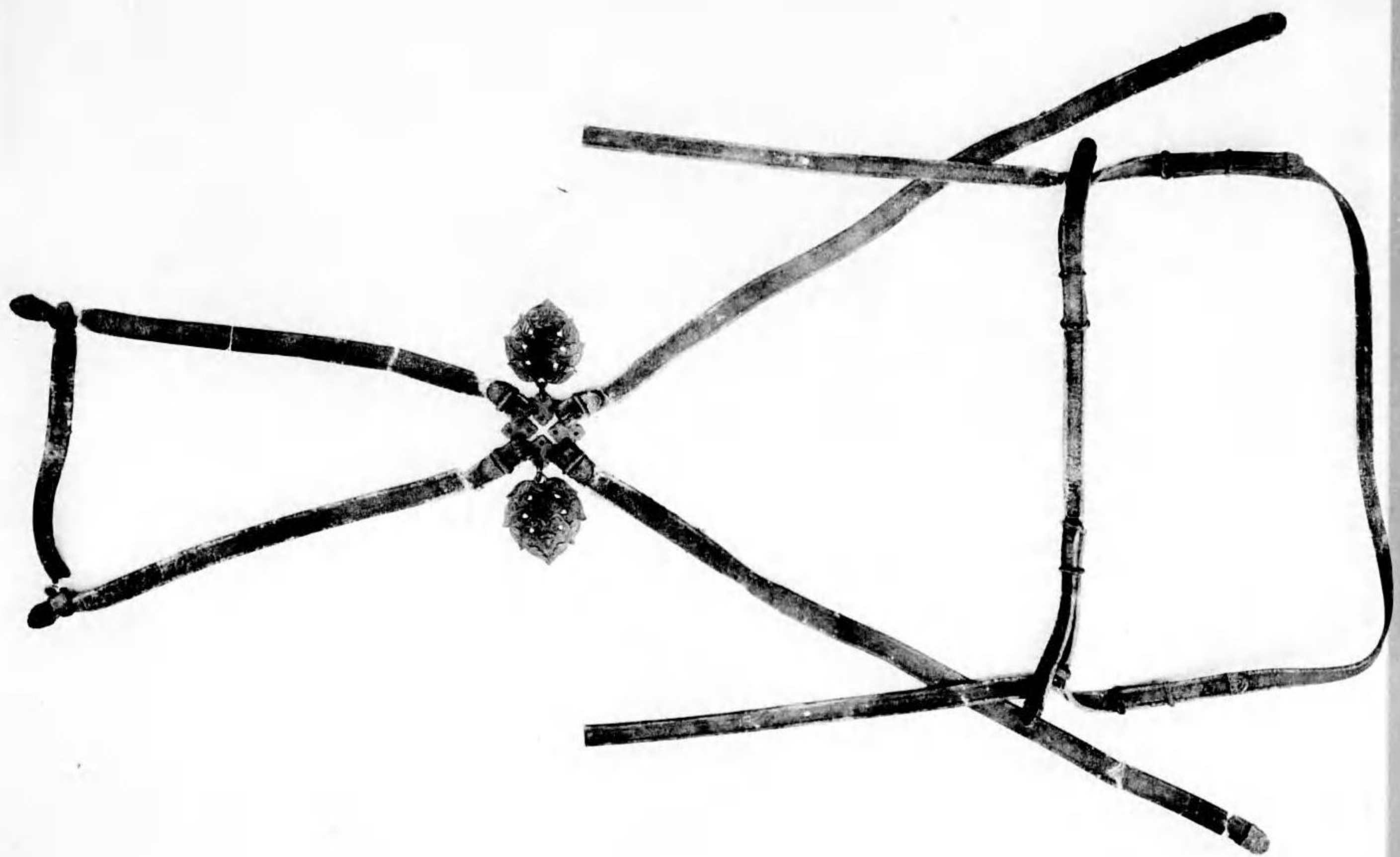


第二十二圖 州 神 馬 具

此の鞍は、古くは土俗に一種の鞍として用いられたもので、
 現在は、馬具として用いられ、馬具として用いられる。
 此の鞍は、古くは土俗に一種の鞍として用いられたもので、
 現在は、馬具として用いられ、馬具として用いられる。
 此の鞍は、古くは土俗に一種の鞍として用いられたもので、
 現在は、馬具として用いられ、馬具として用いられる。

第二十三圖 黒 柿 鞍 (三懸) (五分五釐)

面懸^て、胸懸^て、尻懸^ての三懸^て及び伏^てを合せて示す。
 右は面懸、左は上に胸懸、下に尻懸を合せ示してゐる。共に黒革を本拵とし、提繩をつげき仕金物も少く簡素の拵である。
 面懸は面連・首掛交はるところに仕金物をかき、面連にも香葉の代りに差形に近い金銅金物一個を打つてゐるのみである。其等の金物は金銅製であるが、裝飾は少い。面懸には銜が連なつてゐる。
 銜は狹梨銜の様式に屬するもの、鍍銀黒鍍、銜の鍍銀は左右徑一五釐片喰の長さ九五釐、面懸付は兵兵拵、手綱は太布拵、一端を缺失してゐるが、現存部で長さ二九〇釐に近い。
 胸懸は胸連に香葉を垂れき、纒に金具を金銅製としてゐるのみである。
 尻懸の仕金物は四枚の方板を四葉の如き形に合せたものであり、左右に金銅製の香葉を垂れてゐる。



大馬鞍。
 在鞍前十公分處，以木片或竹片製成鞍橋，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。
 鞍橋之兩端，以皮帶繫於鞍橋之兩端，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。
 鞍橋之兩端，以皮帶繫於鞍橋之兩端，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。
 鞍橋之兩端，以皮帶繫於鞍橋之兩端，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。
 鞍橋之兩端，以皮帶繫於鞍橋之兩端，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。
 鞍橋之兩端，以皮帶繫於鞍橋之兩端，其
 一端以皮帶繫於鞍橋，另一端則以皮帶繫於
 鞍橋之另一端。

圖三十三 馬鞍

第二十四圖 榛地 牟久木鞍 [前]

(縮寫十分之三)

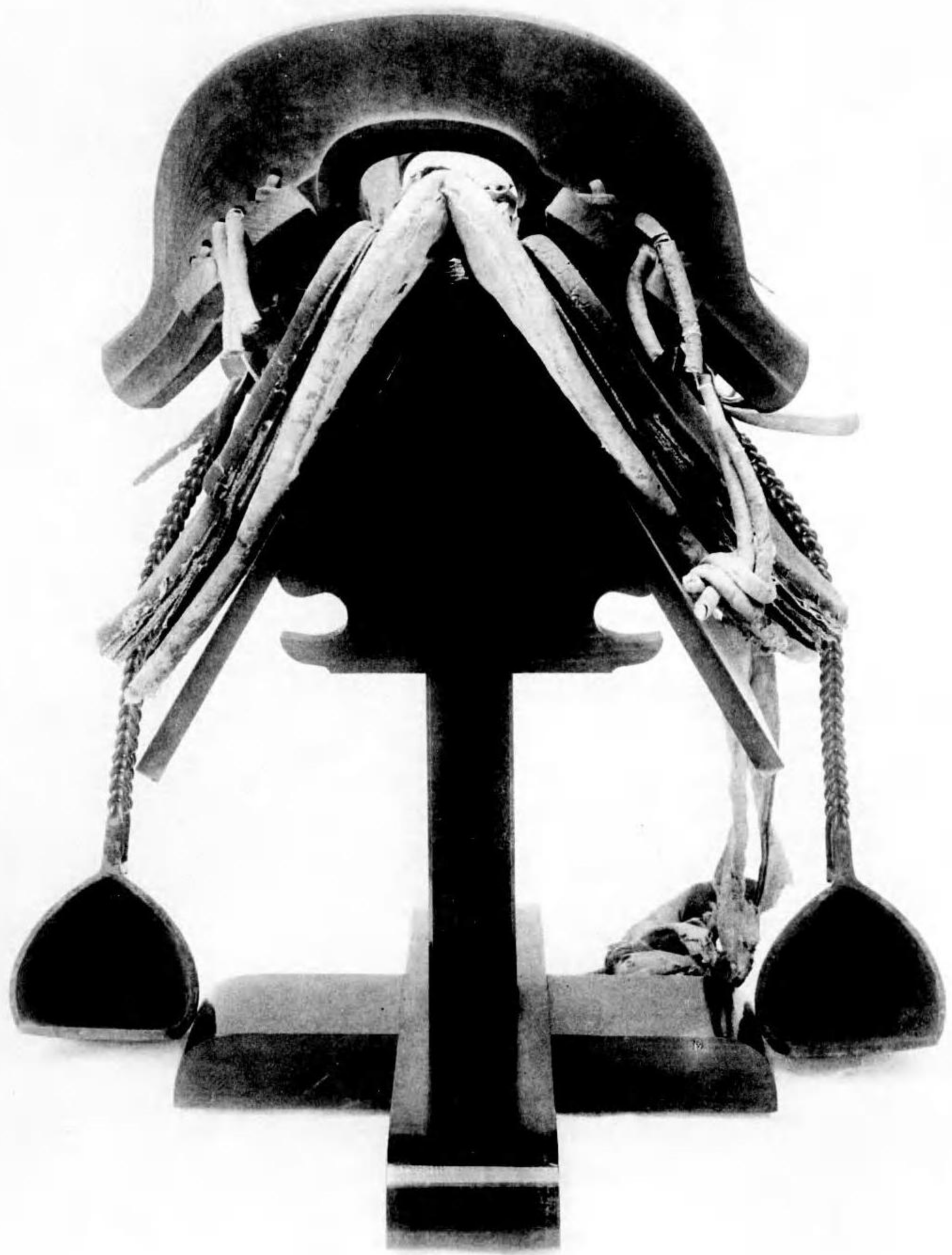
鞍橋より三懸に至るまでを皆具し、殊に鞍橋を完全に遺存し、鏡粗に鐵製兵具銚を用ゐ、且つ三懸に角製玉を貫き連ねてゐるのは著しい。

第二十五圖 榛地牟久木鞍〔後〕 (縮寫十分ノミ)

前輪 高さ二七種 馬挾の長さ三一七種

後輪 高さ二四種 馬挾の長さ 四〇種

鞍橋は前後の兩輪及び居木共に榛地牟久木を材とする。居木先を夫々兩輪の外に突き出し、馬膚の居木受の納穴に組み込み、それに揃んだ韋紐を磯沿ひの海に穿つた双孔に菱形にして通し、居木裏に導いて締め固めて居る。後輪のみにある鞍は白革製丸紐、數片に切れ損じて完全の形を失つてゐる。



第二十五圖 海軍少佐入木海(海) 海軍少佐

此鞍は、
 海軍少佐入木海(海)の
 所有品である。鞍の
 背は、
 非常に高く、
 鞍の
 両側に、
 大きな、
 丸い、
 飾り、
 が、
 付いて、
 いる。

第二十六圖 楝地 牟久木 鞍〔側〕

(縮寫十分之三)

居木は四枚居木、今鞍褥を取り除けて力革・腹帯の根等の居木にかゝる有様を示してゐる。即ち前輪に近寄せられた力革孔から垂れた白革の力革は鎖籠粗に繋り、同じ白革の腹帯の根は居木間から出て脇・腰脊を通して下に出でゐる。

鎖は壺鎖、鐵製打物黒漆塗であるが、黒漆は大部分剥落してゐる。香込の玉縁はやゝ斜めに舌に交つて半舌鎖の形に近付き、胸を高く上にあげてゐるところは前に見た鎖と相等しい。鎖具頭の形をよく見ることが出来るが、其の輪廓は後世の紋板に多少の類似を示し、鎖具はなく、單に平金を入れて鎖粗を受けてゐる。

鎖粗に兵具鎖を用うことは、上古時代に普通とするところであるが、これにあつては同じ鐵製であるが鎖の拵が細かい。

第二十七圖 榛地 牟久木鞍〔斜〕

(縮寫十分ノ三)

鞍褥は磨損が少く、原形を完全に見ることが出来る。

鞆は表に黒漆塗の麩革を用ゐ、輪廓内に一重の町形を

きめこみ、裏を赤漆塗草とし、布横目蘭莖縦目蘭莖木葉

横目蘭莖の順に重ねて心としてゐる。

腰巻は上にある鞆よりやゝ大形に作り、表を白繩とし

花卉飛鳥を以てせる雲草の廣縁を繞し、布を裏裂として

ゐる。



第二十圖 游車水太持 (三)

此の鞍は、江戸時代中期に作られたもので、
背の丸みは、乗者の背にフィットするように
作られており、また、鞍の表面には、
龍や雲などの文様が彫り込まれている。
これは、乗者の威風凛々たる姿を
表現するための装飾である。また、
鞍の裏面には、木製の板が貼られており、
これは、鞍の強度を高めるための工夫である。
この鞍は、現在も京都府の歴史博物館に
所蔵されている。

第二十八圖 榛地 牟久木鞍 [鞆] (縮寫五分ノ三)

榛地 牟久木鞍に具す鞆（カサ）を示してゐる。本圖版に其の表面を、次の圖版に其の裏面を示してゐるが、共に朽損蟲損が殆んどなく、全體に亘つて原形を見ることが出来る。

表裏共に蕙草（カサ）を張り、表には全面を左右均齊に分つて花喰鳥に蕙草を現し、裏は蕙草のみを前後に寄せてゐる。なほ裏に白革の座を作り、居木に緊縛する爲めの革紐を出してゐるが、今は其の一半を缺失してゐる。

圖に於いて下が前、即ち前輪に觸れ、上は後輪の形に従つて圓形をなしてゐる。



第二十八圖 花刺子水刺帽 (五二) 一〇〇〇

此帽係由日本製造，其花刺子水刺之工法，係將白線刺入深色絨布中，以形成鮮明之圖案。此種工法在江戶時代極為盛行，且其圖案多取材於自然景物，如花卉、鳥獸等。此帽之設計，既具實用性，又具藝術性，為當時社會各階層所喜用。其款式之流傳，亦見於後世之各種文獻記載。

第二十九圖 様地卒久木鞍〔鞍橋〕
（縮寫九分之二）
鞍橋の裏面を示してゐる。解説
は前圖版の分を参照。



此物即即心衣生樂器。
 據謂此器與安南「丁心」器，係同
 種。其衣生
 卷二十八圖 點狀半入木鐃（續前）

第三十圖 搽地牟久木鞍 (三懸) (部分図一)

搽地牟久木鞍に具してゐる三懸を示してゐる。面懸は大體に原形を残してゐるが、尻懸と胸懸とは貫緒が所々切れ損じ、全形を見ることが出来ない。

玉三懸ともいふべく、緋打紐を数本重ねて心とし、白革を丸拵にした貫緒に角製玉を連ねてゐる。

面懸に於ては、面連に赤、白黒を交互にならべ、明懸連は白玉のみとし、赤緋は赤黒白をまきてゐるが、共に鹿角製のものを繋ぎ付けてゐる。辻金物は鐵製、衝は額面懸付の端にある鍍金を以て黒革製の衝受けにかけてゐるが、今一方の衝受けの革紐を缺失し、假に鍍金を直に辻金物に結びつけてゐる。

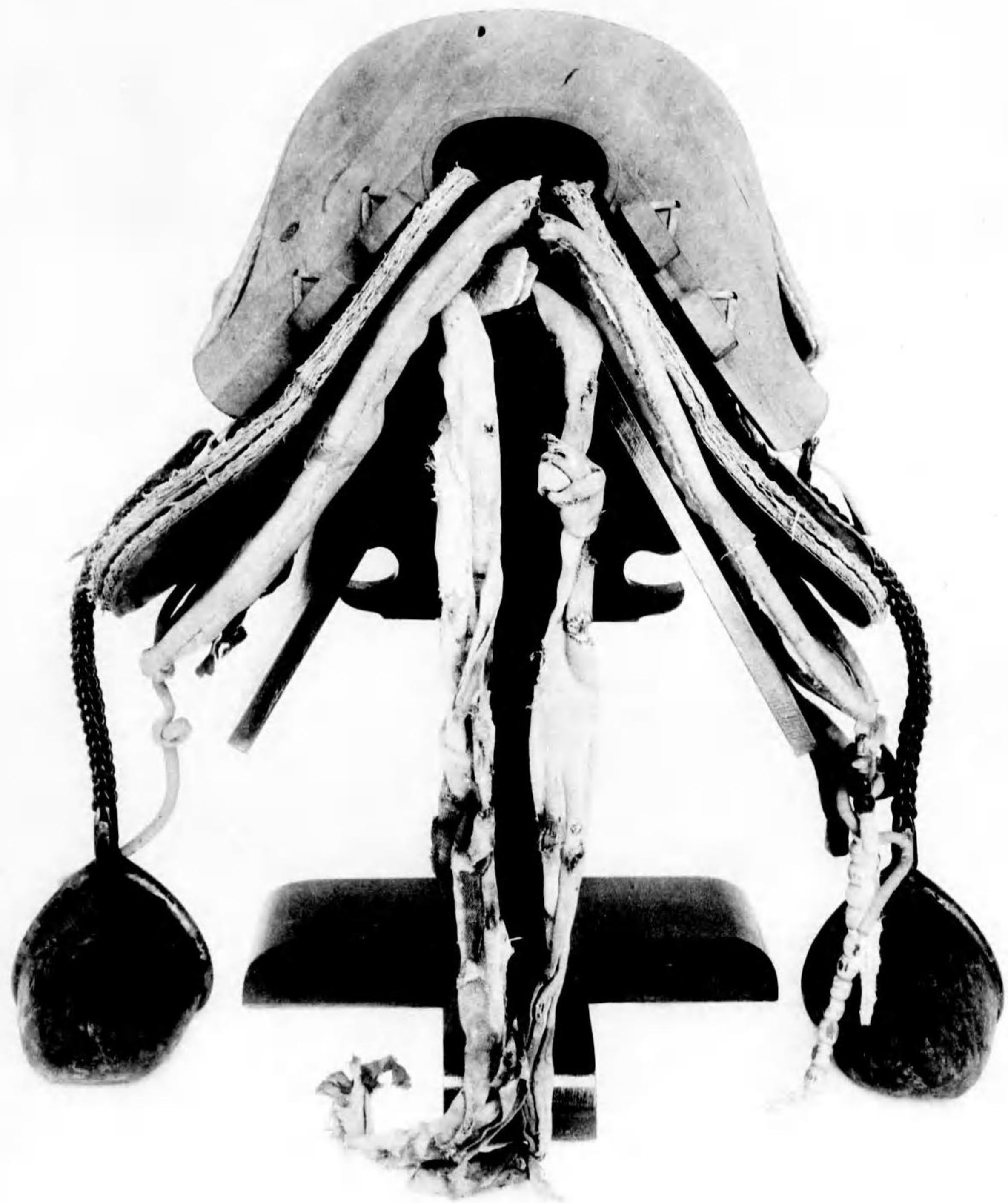
衝は麂衝の樣式に屬するもの、衝の左右長さ一五五釐、片喉の長さ九釐、引手の先には手綱が見えない。

胸懸・尻懸は貫緒が切れ損じた爲めに完全な原形を見ることが出来ないが、圖版中央は尻懸殘缺であらう、赤組紐の尾拵があり、角製の辻金具がある。圖版向つて左端の四花形角製辻金具は胸懸に用ゐられたものであらう。今同じ樣式のもの二個を残存してゐる。又左下に二個を又へてゐる諸形のは三懸終緒の遊管に用ゐられたものかも知れない。なほ此の胸懸、尻懸の殘缺の中には象牙と思はれるもの二個と鹿角とも見得られるもの一個とがあるが、他はすべて鹿角を繋ぎ分けたものである。

第三十二圖 榛地 桑 鞍 [前]

(縮寫十分之三)

榛地桑を材として鞍橋の兩輪をつくり、鏡には鐵製兵具銜の鏡韁を用ゐ、三懸には玉を貫き連ねて居り、鞍褥の完全な原形を残してゐるとを著しい點とする。



第三十二圖 秤 桑 坪 一 匁 二 匁

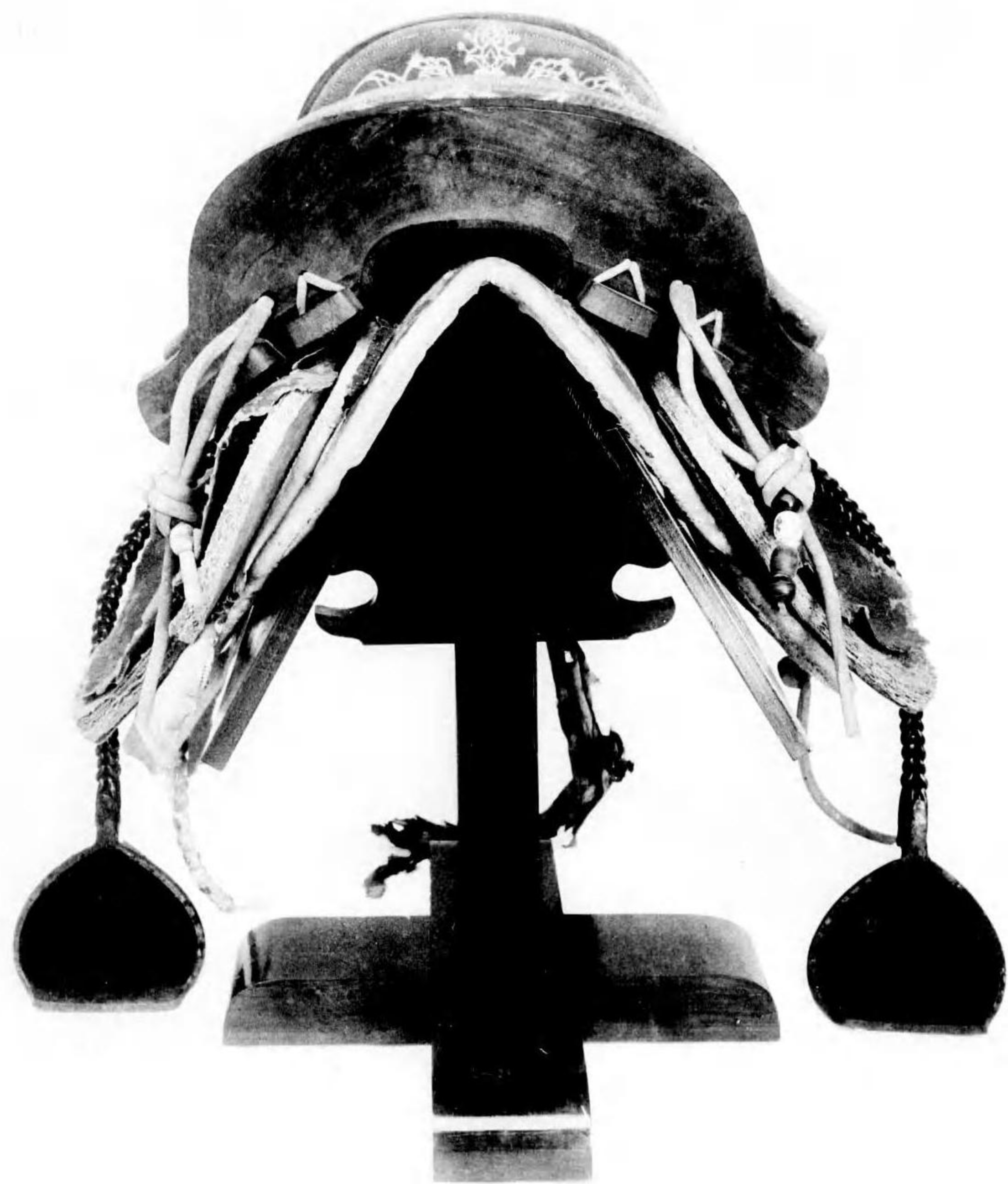
右の如くは、秤の
左の如くは、秤の
右の如くは、秤の
左の如くは、秤の

第三十二圖 榛地 桑鞍〔後〕

(縮寫十分ノ三)

前輪後輪ともに榛地桑を用ゐ、櫂を居木の材としてゐる。四枚居木を兩輪に組む様式は前者と同一であるが、唯柄緒を通す孔は夫々一つ宛である。

後輪にのみある鞍（しん）は、丸紐の白草緒を長く用ゐ、遊管なくして尻懸に直接に搦んで縛り、更に其の先を垂れてゐる。



第三十二圖 鞍 帶 (五)

（續前）

此の鞍は、昔の武士が用いたもので、
 非常に堅く、馬に負担をかけることなく、
 長時間の乗馬に耐えられるように作られていた。
 鞍の中央には、馬の背に当たる部分に、
 柔らかい材料が使われていた。また、
 鞍の両側には、馬の足を保護するための
 大きな皮の袋（フクロ）が取り付けられていた。
 これらは、馬の足を傷めず、滑り防止に
 効果的であった。また、鞍の前後には、
 馬の動きを安定させるための革の帯が
 取り付けられていた。この鞍は、日本の
 伝統的な馬具の代表として知られている。

第三十三圖 榛地桑鞍〔側〕

(縮寫十分之三)

鞆 幅 五三七種 高さ 三四五種
展脊 上幅 五五五種 高さ 三八種

鞍梅・鞆・展脊の三具を皆具してゐる。

鞆は表に黒の皺革を張り、裏を白章とし、心を太布横目蘭莖、太布縦目蘭莖、太布の順に重ねて居り、展脊は白繩を以て表とし、花枝飛鳥を描いた重章を以て縁とし、裏に太布を張つてゐる。



此の鞍は、江戸時代中期に作られたもので、
 非常に美しい刺繍が施されています。
 中央には、鶴や鳳凰などの神鳥が描かれ、
 それを囲むように花文が散りばめられています。
 この鞍は、武家や貴族の馬具として使われていたと
 考えられます。

第三十二回 刺繍鞍 一対

第三十四圖 様地桑鞍〔鞍褥〕

(縮寫五分ノ三)

鞍褥を示すもの、様地桑鞍に具し、原形をよく残存してゐることに於て、前に掲げた様地牟久木鞍に具する鞍褥と相似てゐる。

表裏とを熏草で張り、表に花喰鳥及び唐花を、裏には上下の端に唐花を描いて居り、裏面に白革の座と紐とをつけてゐるが、これは鞍褥を居木に緊縛する爲めの拵である。

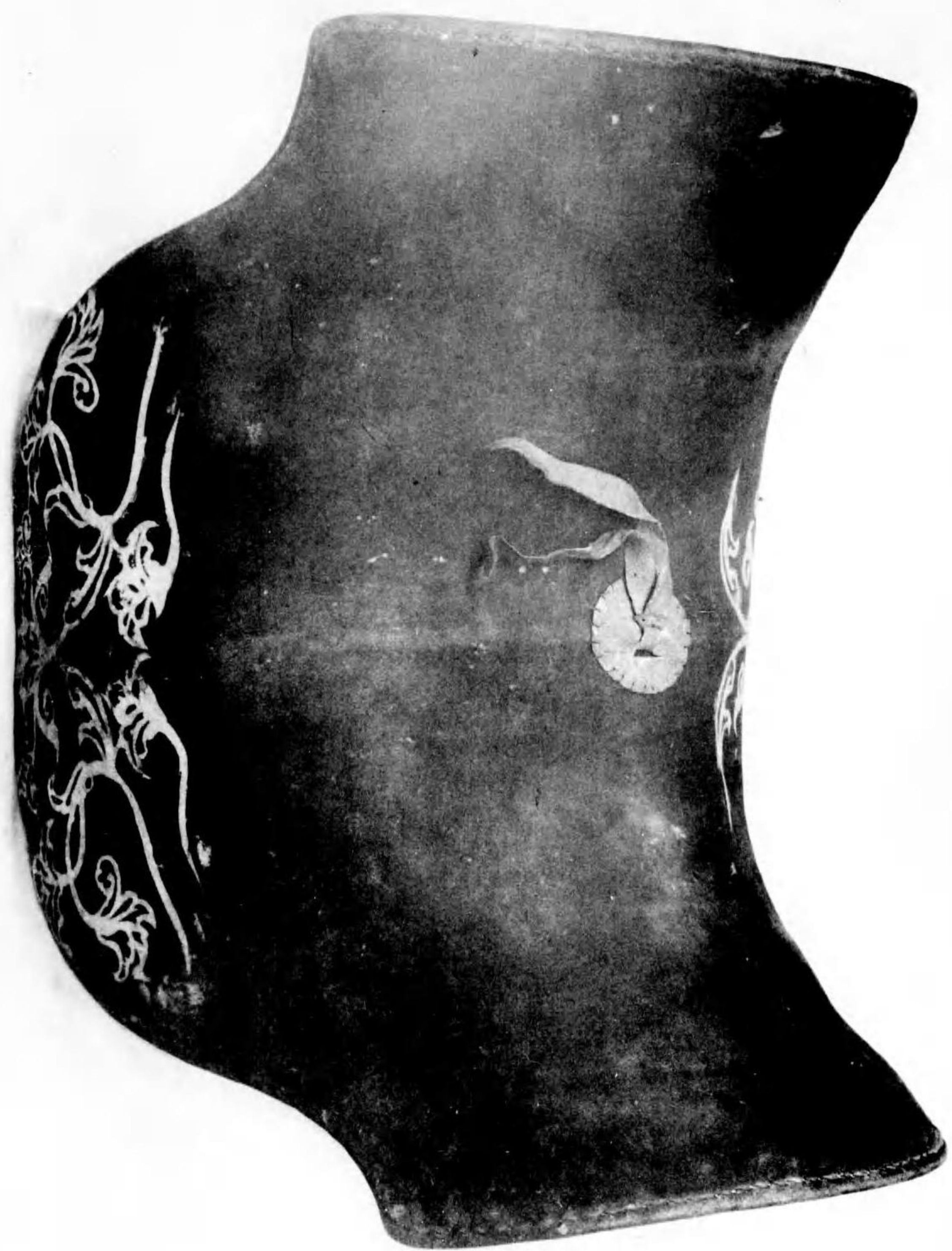
圖に於て下が前、即ち前輪に觸れる部分であり、上邊は後輪の形に随つて圓形をなしてゐる。



第三十四回 雁 象 傳 二卷目

上巻の巻末に、この物語の終りを告げる。其の語は、
四、其の十三年、國は尚ほ一統、平治五年の事、土師
の事。
五、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
六、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
七、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
八、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
九、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十一、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十二、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十三、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十四、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十五、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十六、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十七、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十八、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
十九、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十一、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十二、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十三、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十四、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十五、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十六、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十七、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十八、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
二十九、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十一、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十二、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十三、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十四、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十五、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十六、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十七、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十八、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
三十九、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十一、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十二、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十三、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十四、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十五、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十六、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十七、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十八、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
四十九、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、
五十、其の事、この物語の終りを告げる。其の語は、

第三十五圖 桑地靴の裏
靴の裏を示してゐる。
(縮小五分)



明 洪武 官窑 青花 缠枝 牡丹 纹 瓷 碗

（局部）

卷三十五 明 洪武 官窑 青花 缠枝 牡丹 纹 瓷 碗

第三十六圖 榛 地 桑 鞍〔面懸〕

(縮寫七分ノ三)

面懸を示してゐる。

面連頭連をなす部分が切れ損じてゐる。蘇芳色及び白色の平打紺紐二條を心とする洗革丸紵の貫緒に、黒、白赤に染分けた鹿角製の丸玉を貫き連ねてゐる。辻金物は鐵製、杏葉形を組み合せた形に作り、衝受けの革紐には端金物の外に飾鉾として杏葉形金具を打つてゐる。
狭梨衝は鐵製、引手は此を振り巻いて千段卷の如くし面懸付は長さ一九厘もある兵具鉾をつけてゐる。
手綱は白の太布製、此を丸紵にし、左右の引手の壺にかけ、五〇厘及び五八厘の長さに兩端を垂れ、手綱としては長さ一四〇厘を用ゐてゐる。



第三十六回 網 糸 網 (一)

網は、魚を捕るに用ゐるもので、その種類は多岐にわたる。ここでは、魚を捕るに用ゐる網の一種、糸網について説明する。糸網は、糸を編んで作られる。その編み方は、網の大きさや用途によって異なる。糸網は、魚を捕るに用ゐるだけでなく、鳥を捕るにも用ゐられる。糸網の歴史は古く、縄文時代から存在している。糸網の材料は、麻、木綿、絹などである。糸網の構造は、網の口を狭くし、魚が逃げないようにする。糸網の長さは、数メートルから数十メートルまである。糸網の幅は、数センチメートルから数十センチメートルまである。糸網の網目は、魚の大きさによって異なる。糸網の網目は、魚が逃げないようにする。糸網の網目は、魚の大きさによって異なる。糸網の網目は、魚が逃げないようにする。

第三十七圖 榛 地 桑 鞍 (鏡・胸懸) (縮寫三分ノ一)

右に壺鏡、左に胸懸殘缺を示してゐる。
鏡は鐵製打物、今は漆の大部分が剝落してゐるが黒塗のものであり、脊込の胸が著しく上にあがり、玉縁がやゝ斜に舌と交ることは他の鏡と相似てゐる。長さ三三厘の鐵製兵具銚の鏡粗の片端には力革を受ける鉸具がある。
胸懸殘缺は二個の角製辻金具を殘存し、胸連のみに玉を貫き連ねてゐる。



第三十圖 蘇 絛 鐘 (蘇絛・鐘)

① 此の玉を貫き成したる。
 ② 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ③ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ④ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑤ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑥ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑦ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑧ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑨ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、
 ⑩ 此の玉を貫き成したる。其の玉は、

第三十八圖 榛 地 桑 鞍 (三懸・頸總部分) (原寸大)

右に尻懸、左に胸懸部分を、中央に頸總部分を原寸大に示した。尻懸に於いては、他の三懸と同様に角製玉を貫き連ね、尾挟のみを平緒とし、その端に辻總をかけてゐる。胸懸部分は前圖版にのせたもの、更に角製辻金具を以て革緒と玉緒とを交はらしめた拵を見るべく、中央の角製圓柱形ものは、其の用途を明かにしないが、或は頸總に用ゐられたものと思ふ。花枝文等を細線を以て刻してゐる。

第三十九圖 榛地 牟久木鞍 [前]

(縮寫十分之三)

前輪 高さ 二五五糎 馬挟の長さ 三一糎
後輪 高さ 二四糎 馬挟の長さ 三六糎
仕立に特に著しいものがない。鞍橋の前後の
兩輪は牟久木、四枚の居木は桜を材としてゐる。



第三十五圖 彌次牛及木遊 (一) 彌次牛

第四十圖 榛地 牟久木鞍 (後)

(縮寫十分ノ三)

後輪シテより見る。
今、居木を後輪に揃みつけてゐる手法を見るに、平柄として後輪の馬脛に組合せた後、居木先きの裏から表へとかけた革緒を、磯沿ひの海に穿つた孔に通す。此の孔は斜め下に導かれ、居木裏に出るもので革緒はこの居木裏に出た後に、締め固められて、居木を鞍橋マシに緊着せしめることになるのである。
後輪のみに見られる鞍シテは平紵の黒革緒を以てし、長さ一七裡の縮となつてゐる。
鐵製黒漆塗の帝鏡には平紵の革鎧カシをかけ、鐵製鉸具によつて白草の力革に連ねてゐる。鎧カシの黃金物及び端金物は金銅製、腹帯ハタの根は白鐵革を以てし、これに布の腹帯をかけてゐる。

第四十一圖 榛地 牟久木鞍 [側]

(縮寫十分之三)

鞍梅・鞆及び屨脊は多少損失してはゐるが、併し拵を見ることは出来る。

鞍梅は表に布を座として熏草を張り、これに双鳳相對して花枝を含み。其の間に花卉飛雲を配する文様を現して居るが、心と裏とは缺失の部分が多い。

鞆は表を黒漆の皺革、裏を黒漆革とし、心に布横目蒔蕨木葉縦目蘭蕨布を重ね合し、表には輪廓の中に二重の町形文を押してゐる。

屨脊の表は白龜、雲龍を描いた熏草を縁に廣く繞してゐるが、心の拵は明かでない。

第四十二圖 榛地牟久木居木赤塗鞍〔前〕

(縮寫十分之三)

鞍橋の形は普通見るところであるが、前後の
兩輪に榛地の牟久木を用ゐ、居木のみを赤漆塗
の椀としたのは他に類例がない。
鞍橋・鞍褥・鞍轡・鞍轡等を具してゐるが、三懸
はなく銜のみを残してゐるだけである。



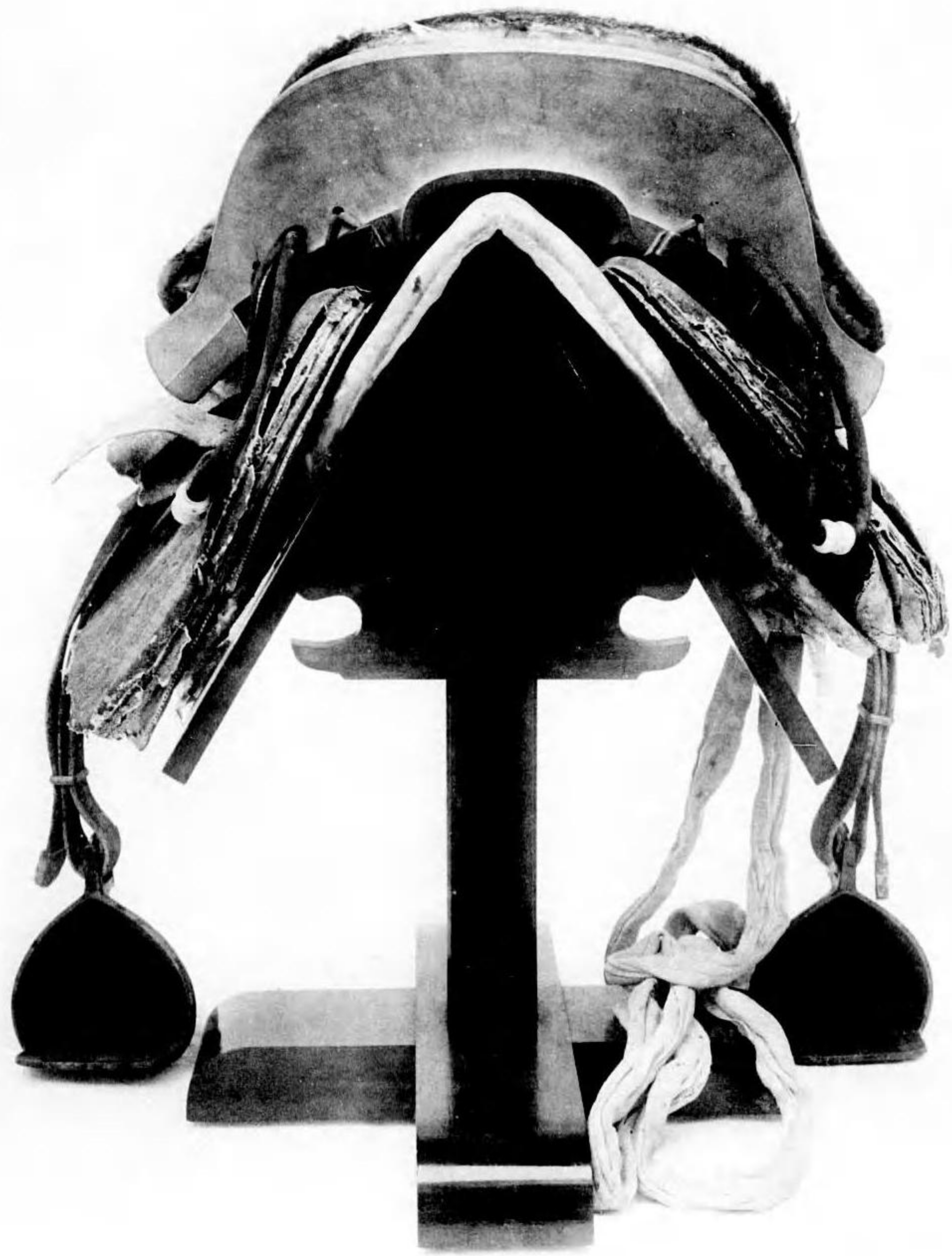
第四十二圖 鞍座半八木製木漆塗

此の鞍座は、昔の武士が用いたもので、木製で漆を塗ったものである。半八木製とは、鞍座の中心部分に八木（杉）を用いたことを指す。この鞍座は、馬に乗るときに、鞍座の両側に大きな重り（おもり）を懸けて、馬の動きを安定させるために用いられる。また、鞍座の表面は滑りにくく、馬の背に負担をかけないようになっている。

第四十三圖 様地牟久木居木赤塗鞍〔後〕

(縮寫十分之三)

前輪 高さ 二〇種 馬挟の長さ 三一五種
後輪 高さ 二二五種 馬挟の長さ 三九五種
居木先まで赤漆塗としてゐる。鞍とらは紫草を巻
紐とし、これに角製の遊管をつけてゐる。



第四十三圖 結世字入木馬木津鞍馬 (一) 京都府立博物館蔵

備子、此は、昔、京都府立博物館蔵の、
 結世字入木馬木津鞍馬の、
 前脚、高、二、五、寸、
 後脚、高、二、五、寸、
 馬鞍の、長、三、五、寸、
 馬鞍の、幅、三、五、寸、
 馬鞍の、重、三、五、斤、
 馬鞍の、色、黒、
 馬鞍の、材質、木、
 馬鞍の、用途、乗馬、
 馬鞍の、年代、明治、
 馬鞍の、場所、京都府立博物館蔵

第四十四圖 襟地牟久木居木赤塗鞍〔側〕

(縮寫十分ノ三)

鞍褥・籠・腰脊の三具を見る。

鞍褥は表に赤地錦、裏に紅綾を張つて居るが、損じが多い。

籠は表を皺革黒漆塗、裏を黒漆革とし、心に布横目蘭蕨縦目蘭蕨櫛葉横目蘭蕨布の順を重ねて入れ、なほ表の皺革に町形をきめこんで裝飾としてゐる。上邊の長さ四四寸、下邊の長さ四〇寸、縦の長さ三三寸。

腰脊は上の鞆よりやや大目に作られ、表に白繩を張り其の縁に花卉雲鹿を描いた熏草を廣く繞し、裏を布としてゐるが心の拵は明かでない。



此の鞍は、
 其の背り高き、
 其の坐面、
 其の脚
 其の鞍
 其の鞍
 其の鞍

第百四十四圖 淵淵字及木根木池型馬鞍 一具 〔鑑別書〕

第四十五圖 榛地幸久木居木赤塗鞍〔斜〕

（縮寫十分ノ三）

鐵製黒塗の壺鏡は香込を著しく鳩胸に作り、其の腹を上を反り味にして居り、舌の出が三廻に及んでゐる。

鏡鞆には黒漆の草を用ゐ、鐵製黒塗の鉸具を以て白草の力革にかけてゐる。腹帯は右側に残つてゐるが、二に折つて白草の根に絡みつけてゐる、其の長さ一方が一〇六廻、他が一三〇廻。



鞍四十五圖 海軍陸軍大尉木村清樹蔵 贈

此の鞍は、明治二十一年、大正十一年の間に、
いづれも、二、三回、日本海軍、陸軍、
騎兵、自衛隊、各隊に、贈られたり、
海軍、陸軍、各隊、に、贈られたり、
可成り、古き、
其の、鞍、は、正しく、
海軍、陸軍、各隊、に、贈られたり、

第四十六圖 榛地牟久木居木赤塗鞍〔衝鞍梅〕（箱篋三分ノ一）

上に蕨製衝、下に鞍梅をのせた。

此の榛地牟久木居木赤塗鞍に於ては、衝のみを残し、三懸はすべて失はれてゐる。衝は面懸付を鑽とし、鏡板は重ねの蕨製に拵へてゐる。

鞍梅は裏を示してゐる。表は赤地唐花錦の上に張り、其の下に白繩布と重ね、裏には紅地忍冬唐草綾を張り、表と同様に下に白繩布を重ねてゐる。なほ裏に於いて、前輪寄に大きく花形に紫革の座をつけ、これに白革の緒を出してゐるのは、鞍橋に締め着ける締緒であらう。

第四十七圖 椽地柿組三懸鞍 [前]

(縮寫十分之三)

鞍橋^註鏡等の指に特に記すに足るものはないが
麻糸組の三懸を用ゐてゐるのは他に類がない。



第四十九圖 奈良縣三郷家 (前)

(續前)

此鞍の三郷を以てしるるの鞍に類せり。
奈良縣の南に於て馬に用ふるものなり。

第四十八圖 椽地柿組三懸鞍〔後〕

(船隻十分ノ三)

前輪 高さ 二六五程 馬挟の長さ 三二程
後輪 高さ 二〇程 馬挟の長さ 三八程

居木兩輪共に椽地柿を材として居る。居木締
の緒に白草を用ゐ、鞍は薰草を以てしてゐるが
遊管の類を用ゐてゐない。



第四十八圖 鞍掛於櫛三懸鈴 (對)

(續前)

張背の櫛を掛くことなり。

① 櫛の背に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。

② 櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。

③ 櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。

④ 櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。櫛の櫛に櫛を掛く。